

スケジュール

第1日 6月27日(土)

	6201	6202	6203
セッション1 10:00-11:30	< 大学院生パネル > コミュニケーション学に 萌芽する未来 河合	《日本》 桜木	医療／福祉 現場 宮原
支部会 11:40-12:10	北海道 (6302), 東北 (6301), 関東 (6201), 中部 (6202), 関西 (6203), 中国四国 (6310), 九州 (6205)		
12:10-13:00	昼食		
セッション2 13:00-14:30	< 特別セッション > コミュニケーション研究会 初年次教育とコミュニケーション教育 の接点を探る 吉武	< 支部大会 パネル > 中林	表象としての大統領制 宮本
14:40-15:10 15:10-15:40 15:50-16:50 17:00-18:30 18:40-20:30	会場: 6204教室 開会式 (司会: 中津川 智美) 総会 (司会: 兼本 円) 基調講演 (吉見俊哉 『アジアからのカルチュラル・スタディーズ —他者=表象としての「アメリカ」と戦後日本—』) シンポジウム (『コミュニケーション学とカルチュラル・スタディーズ』司会: 青沼 智) 懇親会 (学生食堂 3号館1階)		

第2日 6月28日(日)

	6201	6202	6203
セッション3 9:00-10:30	< パネル > レトリック研究会 中西	発話／談話 川内	異文化 吉武
特別セッション 10:40-12:10	巻町住民投票が投げかけたもの 池田	コミュニケーション教育への 通訳教育の貢献 本郷	
12:10-13:00	昼食 / ランチ講演: ダークサイドを描く by Brian H. Spitzberg 会場: 6203教室		
セッション4 13:00-14:30	< 特別企画 > 岡部朗一先生を囲んで 板場	対人関係 守崎	
セッション5 14:40-16:10	< 公開シンポジウム > 少子高齢時代における コミュニケーション教育 浅野	批判理論 松本(健)	
16:20-16:30	会場: 6204教室 閉会式 (司会: 花木 亨)		

Program Timetable

Day 1 - June 27 (Sat)

	6201	6202	6203
Session 1 10:00-11:30	- Student Panel - Young Talents for Communication Studies Kawai	<Japan > as Problematique Sakuragi	Medical & Welfare Providers Miyahara
Chapter 11:40-12:10	Hokkaido (6302), Tohoku (6301), Kanto (6201), Chubu (6202), Kansai (6203), Chugoku-Shikoku (6310), Kyushu (6205)		
12:10-13:00	Lunch		
Session 2 13:00-14:30	- Special Panel Session - Division of Communication Education Yoshitake	Chapter-Proposed Presentations Nakabayashi	Rhetorical Presidency Miyamoto
14:40-15:10 15:10-15:40 15:50-16:50 17:00-18:30 18:40-20:30	Lecture Room (6204) Opening Ceremony General Assembly Keynote Address by Shunya Yoshimi Symposium "Communication Studies and Cultural Studies" Convention Dinner		(MC: Satomi Nakatsugawa) (MC: Madoka Kanemoto) (MC: Satoru Aonuma) Cafeteria, 1st Floor of Building #3

Day 2 - June 28 (Sun)

	6201	6202	6203
Session 3 9:00-10:30	- Panel Session - Division of Rhetorical Studies Nakanishi	Utterance Kawauchi	Intercultural Relations Yoshitake
Special Sessions 10:40-12:10	Special Session on Citizen's Movement Ikeda	Special Session on Interpreting Education Hongo	
12:10-13:00	Lunch / Luncheon Lecture "Delinating the Dark Side" by Brian H. Spitzberg @ 6203		
Session 4 13:00-14:30	- Special Session - Interview with Dr. Roichi Okabe Itaba	Interpersonal Relations Morisaki	
Session 5 14:40-16:10	- Public Symposium - Communication Education in the Age of a Declining Birthrate and Aging Population Asano	Critical Theory Matsumoto	
16:20-16:30	Lecture Room (6204) Closing Ceremony (MC: Toru Hanaki)		

基 調 講 演 Keynote Address

アジアからのカルチュラル・スタディーズ

— 他者=表象としての「アメリカ」と戦後日本 —

吉見 俊哉

東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授

カルチュラル・スタディーズは、テキストの生産と消費、そこにおける主体の構成と権力の作動についての知であるが、それだけではない。この知を成り立たせてきた最大のポイントは、我々が現在、この世界の中で生きているこの場所からの批判的な問いの実践である。つまり、現代資本主義のただなかで、私たちが今、ここにいる日常からのグローバルな文化消費やナショナル／ローカルな政治との入り組んだ抗争に、この知の思想的な可能性は賭けられてきた。例えば1996年春、私たちがスチュアート・ホールをはじめかつての英国バーミンガム大学現代文化研究センターの主要メンバーを招聘して『カルチュラル・スタディーズとの対話』（新曜社 2000年）というシンポジウムを開催したとき、「アジアの歴史的な文脈の中で、いかにカルチュラル・スタディーズを構想するか」という課題が残された。この課題への取り組みは、その後、韓国、台湾、中国、シンガポール、インドなどの研究者と共同で進めてきた *Inter-Asia Cultural Studies* (Routledge 2000年～)の編集や会議、若手研究者や大学院生のレベルでの国際的な集會に発展していった *Cultural Typhoon* (2003年～)などの活動によって、ある程度具体化されてきた。

私自身の研究について言うならば、この十数年間、「戦後アジアにおける他者=表象としての『アメリカ』」について考えてきた。なぜ戦後日本人は、世界的に見ても顕著なほど「親米的」であり続けたのか？ 日本、韓国、台湾、フィリピンなどの東アジアの広い地域における「アメリカ」の受容と反発を、いかにして連続的な空間における出来事として記述できるのか？ これらの地域において「アメリカ」は、文化消費の対象であると同時に、軍事基地でもあり続けた。そこでの文化消費と軍事的暴力はいかなる結びつきをしてきたのか？ 私は、これらの問いが、戦前・戦中のアジアにおける日本の帝国主義、植民地支配からの連続性という問題系につながっていると考えている。戦後日本の「アメリカ」をテキストとして読み解くことで、そうした連続性を明らかにしていく可能性を探りたい。

【経歴】

吉見 俊哉 (よしみ・しゅんや) Shunya YOSHIMI

1957年、東京生まれ。東京大学教養学部教養学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門は、社会学・文化研究。東大新聞研究所助教授、同社会情報研究所助教授、教授を経て、現在、同大学院情報学環教授。主な著書に、『都市のドラマトウロジー』（弘文堂、1987年）、『博覧会の政治学』（中公新書、1992年）、『メディア時代の文化社会学』（新曜社、1994年）、『「声」の資本主義』（講談社、1995年）、『カルチュラル・スタディーズ』（岩波書店、2000年）、『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』（人文書院、2003年）、『メディア文化論』（有斐閣、2004年）、『万博幻想』（ちくま新書、2005年）、『親米と反米』（岩波新書、2007年）、『ポスト戦後社会』（岩波新書、2009年）等多数。

シンポジウム Symposium

コミュニケーション学とカルチュラル・スタディーズ

司会： 青沼 智（神田外語大学）
シンポジスト： 吉見 俊哉（東京大学）
奥田 博子（南山大学）
北本 晃治（帝塚山大学）

吉見先生の基調講演を受け、大会テーマである「コミュニケーション学とカルチュラル・スタディーズ」の関連性と今後のコミュニケーション学の目指すべき方向性を念頭に、講演者を交えて議論を進めていく。両者は共に既成の文学研究の流れから独立する形で生じてきた学問領域であるという点で、すでにその起源において、批評活動を社会へと振り向けようとする、より実践的な視線を共有していたと考えられる。20世紀初頭に、ネオ・アリストテレス派の分析手法によるスピーチ研究を基盤として米国に生れたコミュニケーション学（レトリック批評）では、1950年代後半から60年代に活発化した様々な社会運動やマスコミの急激な発達に伴って、批評対象の拡大と新しい方法論を求める活動が盛んとなり、その動きは、1964年に設立された英国、バーミンガム大学現代文化研究センターを中心として発展するカルチュラル・スタディーズとも次第に共振するものとなっていく。カルチュラル・スタディーズは、単に英文学研究における文化批評が理論的に深化したのではなく、そのような文化批評やマルクス主義が、労働者階級の成人教育という実践的な場に媒介されて登場してきたものである。そこで焦点となる「大衆文化」とは、対象としての「他者」ではなく、知そのものを可能とするフィールドとしての「主体（自分自身）」ということになる。現在のレトリック研究は、「言語論的転回」を経たポスト構造主義的思想の流れの中で、それまで自明とされてきた行為者としての「主体」概念を問い直し、説得技術の効果研究から、様々なイデオロギー的呼びかけに意識的、無意識的に反応する主体の「同一化」作用に焦点を当てた批評・理論研究へと移行してきており、このことは、カルチュラル・スタディーズの持つ、「反本質主義：主体概念(アイデンティティ)は社会的、歴史的に構築される」、「当事者の生きた経験への照準：大衆文化・サブカルチャーの能動的契機に注目し、当事者による意味解釈の過程で生成する言説に重点を置く」「政治性の重視：分析者を含む様々なコンテクストに内在する社会的権力の可視化と介入」といった問題意識と大きく重なり合うものとなってきている。吉見先生は、日本におけるカルチュラル・スタディーズの第一人者として、数多くの出版、批評活動を通して、文化に潜在する支配的意味作用に対峙し、そこへの積極的介入を続けておられるが、本シンポジウムでは、文化内や文化間で生じる多様な意味作用についての先生の深い洞察を拝聴しながら、そこで展開される両学問分野における重要な概念とそれらの関係性から導き出される様々な問題点について、対話を進めていく。21世紀の情報社会における学問の意義を探究する吉見先生の批評実践は、今後のコミュニケーション教育・研究の方向性を探る上で、大きな示唆を与えてくれるものとなるであろう。

特別セッション1 Special Session 1

巻町住民投票が投げかけたもの

パネリスト： 渡辺 登 (新潟大学)
パネリスト： 桑原 三恵 (巻原発計画に反対する住民運動参加者)
パネリスト兼司会： 池田理知子 (国際基督教大学)

日本で初めての住民投票が行われた巻町原発建設を巡る動きから、何を学べるのかを検討する。国に決められた計画に従うのではなく、巻町に住む住民自らが自分たちの意思で是非を決めていく、そのプロセスをたどることは、まさに意味生成を問題とするコミュニケーション学の主題につながる。参加者自らの意思を表明する「場」を作り出すことが重要であるとして住民投票を実現させた巻町の事例は、コミュニケーション研究者にとって学ぶことが多いはずである。

特別セッション2 Special Session 2

コミュニケーション教育への通訳教育の貢献

モデレーター： 本郷 好和 (国際基督教大学)

通訳というコミュニケーション形態に注目し、通訳教育がはたしうるコミュニケーション教育上の効用や貢献の可能性を探る。特に言語間のコード変換としてのみの通訳およびその訓練という従来の通訳教育の位置づけを脱し、対人インターアクションとしての通訳プロセスの理解、多言語社会における(コミュニティー)通訳の位置づけと役割、さらに通訳実践におけるコーチング指導の意義などに注目したい。

コミュニケーション教育研究会特別セッション

Division of Communication Education

初年次教育とコミュニケーション教育の接点を探る

司会・討論者：吉武 正樹 (福岡教育大学)

発言者：川島 啓二 (国立教育政策研究所高等教育研究部・総括研究官、初年次教育学会事務局長)

討論者：松本 茂 (立教大学)

日本の高等教育機関の学士課程における教育の質が大きく問われ、大学は存亡をかけて教育の質の向上に取り組むべき時期にきていると言われている。いわゆる「大学全入時代」を迎えようとしている今、高等教育機関での学習についていけない学生が急増している大学が珍しくなくない。これは、いわゆる偏差値の低い大学に限った問題ではなく、一般入試では選抜性の強い大学においても、この問題が顕在化しつつある。いずれの大学でも、指定校入試、自己推薦入試、アスリート選抜入試、付属・関係校入試など、様々な種別の入試方法で入学してくる学生がいるうえに、入試試験科目の減少といった理由から学生の基礎的な学力を把握しきれておらず、対応がむずかしくなっている。

また、こういった基礎的な学力の欠如だけでなく、対人コミュニケーション不安などの問題をかかえる学生も増えているようだ。こういった学生は、グループでの作業やプレゼンテーションといった活動にストレスを感じ、授業を欠席しがちである。

このような状況を背景に、2008年3月に初年次教育学会が設立されるなど、大学教育の改革を語るときに、「初年次教育」がキーワードの一つとなりつつある。そして、それぞれの大学で展開されている初年次教育と称されている教育内容や方法は様々であるものの、初年次教育の枠組において「コミュニケーション」や「プレゼンテーション」といったことがキーワードのひとつとして取りあげられることが少なくない。

そこで、本パネルでは、初年次教育の専門家に、初年次教育の捉え方、実態、研究活動等についてご発言していただき、コミュニケーション教育学の専門家との対話によって、どのような接点があるのかどうかについて検討したいと考えます。

ランチ講演 Luncheon Lecture

ダークサイドを描く Delineating the Dark Side

Brian H. Spitzberg

サンディエゴ州立大学コミュニケーション学部教授

人間関係に関する理論のほとんどは、自発的で相思な関係に焦点をあてているが、現実的に人間関係には上手くない面もあり、その暗い面について研究を進めることも必要である。このように、研究者が人間関係

とコミュニケーションに関する研究や理論について追及する課題を再構築するために、この10年ほどの間に発展してきた考え方が、「コミュニケーションのダークサイド」である。具体的にこのランチ講演では、人間関係を理解するためのパラダイムとしてのダークサイドについて、ストーキングなどダークサイドのコミュニケーションについて得られた近日までの研究成果をもとに検証し、説明していきたい。

Most theories of relationships tend to focus on voluntary and mutually desired relationships. Nevertheless, there are relationships with problems, and there is a need to examine the dark side of relationships. The "dark side" of communication is a perspective that has evolved over the past decade to re-orient the types of questions scholars ask of their research and theory. Specifically, the nature of the dark side as a paradigm of looking will be examined and explicated, with an eye toward its accomplishments to date on dark side of communication such as research on stalking.

本講演は、コミュニケーションのダークサイド研究（ストーキングなど）の第一人者である、Brian H. Spitzberg 教授による講演です。講演は英語で行われますが、今堀会長が日本語で簡単なまとめを随時入れながら進行します。

なお、この講演は、昼食時に開催されますが、昼食をとりながら講演を聞く・参加するという形式で行われます。各自、昼食を持参のうえ、6203 教室にお集まりください。

【経歴】

Brian H. Spitzberg

米国南カリフォルニア大学 コミュニケーション人文科学部博士課程修了（1981年、Ph.D. in Communication Arts and Sciences）。現在、米国サンディエゴ州立大学コミュニケーション学部教授。専門は対人コミュニケーション論。対人コミュニケーション能力（Interpersonal Communication Competence）、コミュニケーションのダークサイド研究の第一人者である。コミュニケーション能力研究ですでに知っている者も多いだろう。近年では、研究の焦点をコミュニケーションのダークサイド研究に移している。

こうした対人コミュニケーションの分野に多大な著作がある。

主要著書に:

Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (1984). *Interpersonal communication competence*. Beverly Hills, CA: Sage.

Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (1989). *Handbook of interpersonal competence research*. New York: Springer Verlag.

Cupach, W. R., & Spitzberg, B. H. (2004). *The dark side of relationship pursuit: From attraction to obsession and stalking*. Mahwah, NJ: Erlbaum.

主要編書に:

Cupach, W. R., & Spitzberg, B. H. (Eds.). (1994). *The dark side of interpersonal communication*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (Eds.). (1998). *The dark side of close relationships*. Mahwah, NJ: Erlbaum.

(邦訳:『親密な関係のダークサイド』 谷口弘一・加藤司(訳) 北大路書房 2008年)

W. R. (Eds.), (2007). *The dark side of interpersonal communication (2nd ed.)*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. (邦訳:『対人関係のダークサイド』 加藤司・谷口弘一(訳) 北大路書房 2008年) などがある。

また、さまざまな学術賞をも受賞している。

特別企画

岡部朗一先生を囲んで Special Interview with Dr. Roichi Okabe

スピーカー： 岡部 朗一 (南山大学名誉教授)

インタビュワー： 板場 良久 (獨協大学)

岡部朗一先生は南山大学をこの3月に退職され、長年の研究教育生活に一区切りをつけられました。そこで、特別企画として、長年に渡ってコミュニケーション研究教育に多大な功績を残された先生に、自らのこれまでの研究教育生活を振り返っていただきながら、現在のコミュニケーション研究教育が抱える問題点、これからのこの学問の進んでいく道などを共有する機会としたい。コミュニケーション学の偉大なる一学徒のこれまでの研究の歩み、その中での奮闘、苦闘、そして喜びなどをパーソナル・ヒストリーも含めてお話しいただきたいと思います。

具体的には、先生が米国で、コミュニケーション研究を志したころの話(1964年秋、1970年代前半)、1989年に日本コミュニケーション研究者会議を設立したころの話、そして、先生がお考えになるコミュニケーション学の認識論、存在論といった話をしていただく予定です。そして、コミュニケーション学の方向性、CAJに対する思いなども語っていただこうと思います。これからのコミュニケーション学を担う学会員に叱咤を含めて、エールを送っていただきたいと思います。

インタビュー形式で進行いたしますが、随時、参加者と意見交換などを行いたいと思います。

コミュニケーション研究のこれまでの歩みの一端を知り、そして、これからを一人一人が考える機会になることを希望しています。

公開シンポジウム Public Symposium

少子高齢時代におけるコミュニケーション教育 —専門職養成の立場から—

Communication Education in the Age of a Declining Birthrate and Aging Population: From the Perspectives of Training Specialists

- コーディネーター： 浅野 良雄 (対話法研究所所長)
パネリスト： 柳澤 利之 (新潟青陵大学短期大学部人間総合学科准教授)
「介護福祉士養成の立場から」
沼野 みえ子 (新潟青陵大学短期大学部人間総合学科准教授)
「保育士・幼稚園教諭養成の立場から」
栄長 敬子 (新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科助教)
「音楽活動の視点から見た保育士・幼稚園教諭の養成」

わが国の高齢化は世界に例をみない規模と速度で進行しており、高齢化率は2008(平成20)年に22.0%を超えている。また、少子化の進行も顕著であり、2007(平成19)年の合計特殊出生率は1.34人にとどまり、主要先進国の中で最も低い水準にある。少子高齢社会において、高齢者やこどもの成長や生活を支援する介護や保育の専門職の必要性はますます高まっている。

これらの専門職に共通していることは、高いコミュニケーション能力が求められることである。なぜなら、介護や保育は、世代や生活環境が異なる対象との人間的な関わりを通じて成立する援助であり、家族、地域社会、複数分野にわたる専門職等との連携に基づいたアプローチだからである。

社会的な要請が高まる介護・保育専門職のコミュニケーション能力と、それを養成するコミュニケーション教育はいかにあるべきか、実践報告、パネルディスカッション、参加者との討議を通じて考える。

支部会議 Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。

Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6月27日(土) Saturday, June 27 14:40-15:10 @ 6204 (Lecture Room 6204)

開会式 Opening Ceremony

司会： 中津川 智美

開会の辞： 今堀 義（西南学院大学・日本コミュニケーション学会 会長）

挨拶： 諫山 正（新潟青陵大学短期大学部 学長代行）

6月27日(土) Saturday, June 27 15:10-15:40 @ 6204 (Lecture Room 6204)

総会 General Assembly

司会： 兼本 円

6月28日(日) Sunday, June 28 16:20-16:30 @ 6204 (Lecture Room 6204)

閉会式 Closing Ceremony

司会： 花木 亨

閉会の辞： 今堀 義（西南学院大学・日本コミュニケーション学会 会長）

◆ 昼食のご案内

両日とも学生食堂は利用できません。お弁当を注文するか、ご持参ください。

◆ 懇親会のご案内

会場：学生食堂（3号館1階）

会費：¥5,000

申し込み方法：事前申し込みについては表紙の裏の案内をご覧ください。当日申し込みも可能ですが、人数が限定されます。受付にてお申し込み下さい。

書籍・教育機材の展示

6号館1階学生ホールにて、各種の展示を行っています。ご自由にご覧ください。

A variety of educational materials are to be displayed at Building #6, 1st Floor, "the Student Hall".

6月27日(土) Saturday, June 27

受付 9:30~ Registration commencing at 9:30

時間	教室	プログラム Session
10:00 11:30	6201	セッション 1 大学院生パネル Student Panel 「コミュニケーション学に萌芽する未来」 司会： 河合 優子 (東海大学) レスポンドント：師岡 淳也 (立教大学) 1. 彼らの東北、俺(お)らだの東北 (とうほぐ) —東北イメージの生産と消費— 伊藤 夏湖 (東京大学) 2. 「外人/gaijin」の「語り」: —境界線への交渉と抵抗— 坂田 史 (西南学院大学)
	6202	《日本》 <Japan> as Problematique 司会： 桜木 俊行 (Gustavus Adolphus College) 1. 日本的コミュニケーション・スタイルのマクロ的再解釈 —日本人集団主義説をもとに— 古家 聡 (武蔵野大学) 2. 日本人の対人コミュニケーション能力とメッセージデザイン —構成主義コミュニケーション論からの考察— 小山 哲春 (京都ノートルダム女子大学)
	6203	医療／福祉現場 Medical & Welfare Providers 司会： 宮原 哲 (西南学院大学) 1. 医師・患者間の情報提供および意思決定における認識ギャップ —医師と医療消費者の結合データによる実証分析— 塚原 康博 (明治大学) 2. デイケアの世代間コミュニケーション 野中 昭彦 (関東学院大学) 3. 音楽療法士の調節的コミュニケーション行動 —共同注意の視線分析を通して— 船本 菜穂 (兵庫県立大学) 宮本 節子 (兵庫県立大学)
11:40 12:10		支部会議 Regional Chapter Meetings 6302 北海道支部 Hokkaido 6301 東北支部 Tohoku 6201 関東支部 Kanto 6202 中部支部 Chubu 6203 関西支部 Kansai 6310 中国四国支部 Chugoku & Shikoku 6205 九州支部 Kyushu
昼食		Lunch

時間	教室	プログラム Session
13:00 14:30	6201	セッション 2 コミュニケーション教育研究会特別セッション Division of Communication Education 「初年次教育とコミュニケーション教育の接点を探る」 司会・討論者：吉武 正樹（福岡教育大学） 発言者：川島 啓二（国立教育政策研究所高等教育研究部・総括研究官、 初年次教育学会事務局長） 討論者：松本 茂（立教大学）
	6202	支部大会パネル Chapter—Proposed Presentations 司会：中林 眞佐男（千里金蘭大学） 1. 医療現場におけるコミュニケーションの現状 関西支部 桂木 聡子（神戸市薬剤師会・武庫川女子大学） 2. コミュニケーション教育と英語コミュニケーション教育 —多学問的考察— 東北支部 小林 葉子（岩手大学） 3. 沖縄のオバーの魅力とその源泉 —コミュニケーション学的考察— 九州支部 兼本 円（琉球大学）
	6203	表象としての大統領制 Rhetorical Presidency 司会：宮本 節子（兵庫県立大学） 1. バラク・オバマが築きあげたレトリカル・ヴィジョン —2008年大統領選挙のファンタジー・シーム批評— 加藤 拓也（神奈川大学） 2. 形成されるナショナル・イメージ —米国大統領テレビ討論会における音声、映像、作成資料— 松本 明日香（筑波大学）
14:40 15:10	6204	開会式 Opening Ceremony 開会の辞：今堀 義（西南学院大学・日本コミュニケーション学会 会長） 挨拶：諫山 正（新潟青陵大学短期大学部 学長代行）
15:10 15:40	6204	総会 General Assembly
15:50 16:50	6204	基調講演 Keynote Address アジアからのカルチュラル・スタディーズ —他者=表象としての「アメリカ」と戦後日本— 吉見 俊哉（東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授）
17:00 18:30	6204	シンポジウム Symposium コミュニケーション学とカルチュラル・スタディーズ 司会：青沼 智（神田外語大学） シンポジスト：吉見 俊哉（東京大学） 奥田 博子（南山大学） 北本 晃治（帝塚山大学）
18:40 20:30	3号館 1F 学生食堂	懇親会 Reception 当日の申し込みも可能です（10名程度）。受付にて、お申し込み下さい。（¥5,000）

6月28日 (日) Sunday, June 28

受付 9:00~ Registration commencing at 9:00

時間	教室	プログラム Session
9:00 10:30	6201	<p>セッション 3 パネル レトリック研究会 Japan Society for Rhetorical Studies 「統合のレトリック」「アーティキュレーション」「ネットワーク理論」 — コミュニケーション学とレトリック研究を接合（節合）するものを探究して —</p> <p>司会： 中西 満貴典（岐阜市立女子短期大学）</p> <ol style="list-style-type: none"> バラク・オバマは人種を語る — 「A More Perfect Union」演説をめぐる考察— 花木 亨（南山大学） A study of the Japanese classic novel "Kokoro": Language, ideology, and culture Katsuya Koresawa (Kansai Gaidai University) ネットワーク理論を通して批判的レトリックを再考する — 権力から管理への変化を中心に — 田島 慎朗（ウェイン州立大学）
	6202	<p>発話／談話 Utterance</p> <p>司会：川内 規会（青森県立保健大学）</p> <ol style="list-style-type: none"> フェイス・ワークとディスコース・マーカの用法拡張 — 若者言葉としての「じゃん」の考察から— 福原 裕一（東北大学） 相互行為上で各発話の効力を決定づけるものは何か — 「社会的コンテクスト」と「参与者」の協応に基づく論考— 水島 梨紗（北海道大学） 名塩 征史（北海道大学） お詫びの言葉に対する望ましい応答 — 大学生を事例として— 古川 典子（兵庫県立大学） 宮本 節子（兵庫県立大学）
	6203	<p>異文化 Intercultural Relations</p> <p>司会：吉武 正樹（福岡教育大学）</p> <ol style="list-style-type: none"> 医療通訳者の異文化仲介者としての役割について 水野 真木子（金城学院大学） The Expressive Dimension of the <i>Kamigakari</i>: A Study of Religious Act of Expressing Takuya Sakurai (University of Oklahoma)
10:40 12:10	6201	<p>特別セッション1 巻町住民投票が投げかけたもの Special Session on Citizen's Movement</p> <p>パネリスト： 渡辺 登（新潟大学） パネリスト： 桑原 三恵（巻原発計画に反対する住民運動参加者） パネリスト兼司会： 池田 理知子（国際基督教大学）</p>
	6202	<p>特別セッション2 Special Session on Interpreting Education コミュニケーション教育への通訳教育の貢献</p> <p>モデレーター： 本郷 好和（国際基督教大学）</p>
<p>ランチ講演 Luncheon Lecture: "Delineating the Dark Side" by Brian H. Spitzberg @ 6203</p>		

時間	教室	プログラム Session
13:00 14:30	6201	特別企画 岡部朗一先生を囲んで Special Interview with Dr. Roichi Okabe スピーカー： 岡部 朗一 (南山大学名誉教授) インタビュアー： 板場 良久 (獨協大学)
	6202	セッション 4 対人関係 Interpersonal Relations 司会： 守崎 誠一 (神戸市外語大学) 1. コミュニケーションの意欲維持にかかわる諸要因 <div style="text-align: right;">町田 佳世子 (札幌市立大学)</div> 2. How socio-cultural relationships are constructed and reconstructed through communicative strategies? <div style="text-align: right;">Kiyomi Tanaka (Meikai University)</div> 3. 親密化の要因としての対人魅力、自己開示および非言語行動 —同性友人二者による日本人同士と異文化間の関係の比較— <div style="text-align: right;">内藤 伊都子 (日本大学)</div>
14:40 16:10	6201	公開シンポジウム Public Symposium 少子高齢時代におけるコミュニケーション教育 —専門職養成の立場から— コーディネーター： 浅野 良雄 (対話法研究所所長) パネリスト： 柳澤 利之 (新潟青陵大学短期大学部人間総合学科准教授) 沼野 みえ子 (新潟青陵大学短期大学部人間総合学科准教授) 栄長 敬子 (新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科助教)
	6202	セッション 5 批判理論 Critical Theory 司会： 松本 健太郎 (二松学舎大学) 1. 沈黙の声 —多声化するコミュニケーションの矛盾— <div style="text-align: right;">小坂 貴志 (立教大学)</div> 2. 「国境なき医師団」による「人道主義」の構築 —北朝鮮における人道援助活動の事例から— <div style="text-align: right;">久保田 絢 (目白大学)</div> 3. 前期ベンヤミンにおける言語論的理論枠組みの検討 —そのコミュニケーション／システム論的受容に向けて— <div style="text-align: right;">首藤 天信 (立教大学)</div>
16:20 16:30		閉会式 Closing Ceremony